

# 『人間学研究所 20年の歩み』を編んで

——本学の研究の過去と未来を考える——

小林 康正

## はじめに —『人間学研究所 20年の歩み』の構成—

最初に「『人間学研究所 20年の歩み』を編んで」ということで、20年史を編んだことで私が学んだことについてお話させていただきます。この編集作業をしているあいだにいろんなことを学んだわけですが、そのことを考えつつ、本学の研究の過去と未来を考えるというテーマでお話したいと思います。このことについて内部、外部からいろいろご意見をいただければありがたいと思っております。

『人間学研究所 20年の歩み』の目次は、

### 第1部

ヴィジュアルでふりかえる人間学研究所の20年

### 第2部

序章 大学組織の変遷と人間学研究所

第1章 人間学研究所の草創期

第2章 所長列伝で辿る研究所の歴史

第3章 アーカイブとしての人間学研究所

結び 人間学研究所の将来とその課題

〈資料〉人間学研究所の活動の軌跡

となっています。

第一部が「ヴィジュアルで振り返る人間学研究所20年」。ここにはいろいろな懐かしい写真があるかと思います。第二部が私の書いたもので、人間学研究所の歴史を私なりの視点で書かせていただいたものになります。ですので、これには異論・反論・オブジェクションを期待して書いたとお考えいただければありがたいと思います。

## 記憶の回復と創造としての修史

スライドに「私たちは健忘症である」と掲げました。最初にこの本を書いて思ったのは、私

たちは健忘症である、非常に物忘れが激しいということです。「知らないことが多かった」というのがこの20年史を編んで思ったことです。20年史の主な資料は、紀要、ニューズレターや出版物、ホームページというようなもので、これらを通読して考えたところ、私は人間学研究所について何も知らなかったという事実につきあたったということです。

こうした健忘症について、西川祐子元所長はかつて鶴見和子文庫のシンポジウムの趣旨を説明する中で次のようにお書きになっています。

「大学や図書館は学生だけでなく、教職員も来たりて去る場所である」（『人間学研究』7巻（2006））。そしてシンポジウムや研究会、プロジェクトを行うひとつの目的として「記憶の復活とあたらしい意味づけを行う」ということを仰ってました。

まさに私もこの20年史を編む過程で、「来たりて去る場所である」ということを感じました。記憶というものがすぐに失われていって、我々がいかに記憶を共有する必要があるのかということを感じたわけでございます。ですから今回の修史作業は、記憶の回復と創造としての修史ということ、そして記憶の共有ということを目としています。

紀要のすべてを通読いたしました、非常に苦痛でした（笑）。『20年の歩み』は非常にコンパクトになっておりますので、これを見ていただければ、私の目を通して20年の歴史が分かるという形になっております。こうした簡易さも、記憶の共有の一助となっているということです。

### なぜ歴史を制作しなければならないのか

では、「なぜ歴史を制作しなければならないのか」という問題なのですが、本学の歴史のなかで、20年の歴史を持っている部署は意外に少なく、人間学研究所と健康管理センターぐらいかと勝手に思っているんですけど（笑）、非常に少ない。その意味で大学の歴史の重要な一部となりえると考えerわけです。

人間学研究所の歴史制作には、こうした一般論とは別に、研究所そのものの存在意義が問われている現状があると考えております。そういった宿題を学長からも渡されています。この人間学研究所をどういうふうと考えていったらいいのだろうかということを常に思い巡らしていたわけです。そこで今回の修史は、この人間学研究所の存在意義を、この歴史制作という方法で明らかにすることになった。「人間学研究所はどうあったか」を問い、過去との対話によって「どうあるべきか」をも含めて、答えのヒントを見つけ出そうという試みを行いたいということになります。

### 「《学術研究》 から 《職業教育》 へ」 という文脈と大学の研究機関の役割

現代の大学はシビアな環境に置かれている。何かと申しますと、スライドに掲げましたとおり、安倍晋三首相がOECD閣僚会議2014年のなかで次のように仰ってます。「学術研究を深めるのではなく、もっと社会のニーズを見据えた、もっと実践的な、職業教育を行う。そうした新たな枠組みを、高等教育に取り込みたい」。文脈の前後を外していますのでなんとも言えませんが、そこには確実に「学術研究から職業教育へ」という高等教育の流れがある。こうした流れはひしひしと私たちも日々感じています。本学もこういった方向はある程度受け入れて、教育ヘシフトしていくことは重要な課題になっていて、実際に我々はそれを行っているということになります。ですので、人間学研究所の現在の問いは、「大学が教育機関化するなかで研究機関の存在意義をどう果たしていくべきか」という問いになってくるということです。そういった問いにたいして、歴史を制作す

ること、すなわち、歴史の中でその答えのヒントを見いだそうというのが20年史の試みです。ですので、私の書いた20年史は事実羅列というよりは、私が現時点のこうした観点から見てある程度重要だと思ったものを取り上げて書いたつもりであります。つまり、我々の歴史からこれらの回答を得ようということになります。

ちなみにですね、これと類似の問いはすでに人間学研究所の歴史の中にありまして、2014年2月の人間学研究所公開シンポジウムにおきまして、「日本の大学、このごろ焦ってませんか？ ～『社会に役立つ大学』の価値を問う」が実施されています。コーディネーターを担当された黒宮一太先生のお考えのもとに仕組みられたものだと思いますが、こういうイベントがありました。これを歴史制作で私はやりたいということです。そして人間学研究所や本学での研究という営為に当てはめて考えてみたいということです。

### 人間学研究所の目的は何か

人間学研究所の目的とは何だろうかということですね。それをまず確認しておきたいんですけども、本学の人間学研究所というものは、規程の中で以下のように定義されておりました。「研究所は家政学園の建学の理念に則り、人間学の総合的な学術研究を行うことを通じて、文化の発展に寄与すること」。ですから建学の理念に則って人間学の総合的な学術研究を行うということです。ここでは「人間学」とは何かということとは、とりあえず置いておきます。

ここで一点注意しておきたいのは「研究所」となっていることですね。「研究所」というふうになっているのは、他に研究所がないという意味です。つまり人間学研究所は、本学が設立されたときには唯一の研究所としてあったということです。本学の研究は人間学研究所が中心となって、研究のセンターとなって進められるという意図のもとに置かれたという趣旨であります。

人間学研究所の目的は規程の中に、研究所の事業として次のようにあげられています。

- (1) 学際的研究調査およびその成果の発表
- (3) 研究会および研修会の開催
- (5) 研究報告その他出版物の編集発行
- (7) 関係学術組織・機関等との協力
- (8) 研究のために必要な資料の収集および整理（以上、抜粋）

というような形でまとめられています。

この規程を基準に、人間学研究所の歴史を振り返り、どういう活動が行われたのかを確認し、人間学研究所が実際に何をなしたのかということを一いち精査したいと思います。検討項目は以下の6点です。

- ①学際交流による多様な研究成果
- ②研究やプロジェクトなどの経験の蓄積
- ③他の研究プロジェクトや組織の母体
- ④アーカイブ装置としての働き
- ⑤人的交流の場
- ⑥学際交流による相対化・普遍化作用

1つ目は、「学際的交流による多様な研究成果：○」、この部分の後ろに○印を付けていますが、○は「みんなそれを認めてくれるだろう」と勝手に私が思っているという意味ですが、『20年の歩み』の最後にも歴代の研究会の記録が載っています。これだけたくさんのをやってきたのかと。このへんは今日は詳しく触れません。みなさんご覧いただいてご判断ください。

それから2番目、「学術研究やプロジェクトなどの経験の蓄積：△」、このへんは意見の分かれるところで、プロジェクトの研究をしたが、成果が出なかった。成果が出なかったら意味がないんじゃないかという考え方がありますが、私はそうは思わない。そういった経験が共有される形で、それが次のプロセスにつながっていくということをこの本を編んだ中で強く感じました。

それから3番目、「他の研究プロジェクトや組織の母体となった：○」、人間学研究所はたとえば地域協働研究教育センター、臨床物語学研究センターのある意味での母体となっています。人間学研究所の共同研究プロジェクトとして出発したものから分かれ出て行ったところがあります。そういった母体としての役割を果た

してきた。

それから4番目、今日は一番ここを取り上げてお話ししたいのですが、「アーカイブ装置としての働きを持っている：△」。

それから「人的交流の場の提供をしていた：△」、これは間違いはないと思いますが、そこを評価するかしらないかという話ですね。

それから「学際交流による相対化・普遍化作用：△」これはとても重要だと思いますが、専門知識というもので我々は教育しなければならないのですが、その知識をどうやって相対化し教育に使える水準に一般化していくかというときに、他の学問分野と触れあうということの重要性があるのではないかということ、この20年史を編集するなかで見たということです。

#### アーカイブ装置としての人間研

今日はこのなかの4番目「アーカイブ装置としての働き」について触れたいと思います。人間学研究所といいますと、だいたい1番目の話になるわけですが、今日は人間学研究所が実はアーカイブ装置としての働きを持っていたという話をしたいと思います。アーカイブ（archive）の通例的な理解を言えば、「公文書。古文書。公文書保管所。文書館。記録〔公文書類〕保管所。官文庫（特に公記録、歴史文書を保管するもの）」ということになるかと思います。ですから、本学でいえば図書館、これがアーカイブに相当すると思います。しかし、このアーカイブの捉え方は狭すぎると思います。こうした理解は価値の存在を前提にした見方になってしまっていると思うんですね。たとえば西田幾多郎のアーカイブが京都学園大にあります。それは西田幾多郎の価値が発見されて、その価値を前提に資料が収集されたものでしょう。しかし、西田幾多郎という既成の価値の大きさが、アーカイブになる前の価値の発見というプロセスが不可欠だということの確認を見失わせる。ですからアーカイブと言ったら、アーカイブがもうあるんだというふうに我々が思い込んでしまう。それは、制度的なものの見方に制限されてしまっていると思います。アーカイブはそういうものではない。価値の発見というプロセス

がないとアーカイブはないんだということです  
ね。

### 鶴見和子氏関連の共同研究にみる

#### アーカイブ装置としての働き

それに遅まきながら気がついたのは、「鶴見和子の仕事と鶴見和子文庫（京都文教大学図書館所蔵）から思想と方法論の水脈をさぐる」というタイトルの2006年の連続シンポジウム記録を読ませていただいたからなのですが、これはまさにアーカイブ装置としての働き、人間研がアーカイブ装置としての働きを示した一例だったと考えたわけです。そして人間研という一つの大学付置機関が自分たちの資産で自分たちなりに共同研究を繰り返していきとよむのひとつの見本になるのではないかと思ったわけです。

#### 鶴見和子文庫とアーカイブの発見

本学には、鶴見和子氏の蔵書による「鶴見和子文庫」があります。鶴見和子文庫は3部門ありまして、一つ目が鶴見和子氏の蔵書類を開架の一カ所に集め、一般の利用ができる「鶴見和子文庫」。二つ目が「鶴見和子文庫未公開部分」。三つ目が和子さんのお父さんの鶴見祐輔氏の蔵書である「鶴見文庫」です。この整理に関しては図書館に尽力していただいています。

2006年、この鶴見和子文庫をめぐる共同研究が始まっています（連続シンポジウム「鶴見和子の仕事と鶴見和子文庫（京都文教大学図書館所蔵）から思想と方法論の水脈をさぐる」）。鶴見和子文庫の3部門をアーカイブの通例的な価値を考えると、当然ながら、3部門のなかで一般利用に供された「鶴見和子文庫」の蔵書類はあまり価値の低い位置づけになるかと思うんですね。まず鶴見和子文庫未公開部分の、小冊子・雑誌・研究資料・カード・ノート類またはAV資料。鶴見和子文庫をもしアーカイブと見るとすると、ここが本丸にあたるんじゃないかと思うんですね。

ところが、この2006年の研究会の発端は、1番目の「鶴見和子文庫」にあったということです。鶴見和子さんの蔵書であった単行本と叢書が、本学の図書館に入っていて、これは一般利

用ができるわけです。で、このプロジェクトを西川さんが着想した契機は、この一般利用というあり方にかかわって、以下のプロセスをたどって出てきたということです。以前行ったインタビューで私が感じたままに紹介したいのですが、その契機は、あるとき院生が京都の明治時代の日記の本（たぶん中野卓さんの本だと思うんですが）を図書館から借りて西川先生のところに持ってきた。ところが、それが赤線だらけの本だった。そこで「なんであなたこんなに書き込みしたの」、「いえ、もともと赤線が入ってました」というやりとりがあったわけですが、結果として、この本が鶴見和子文庫の本で、赤線が鶴見和子さん本人の線引きであることが分かったわけです。このようにして書き込みが「発見」され、そこに鶴見和子氏の思考の痕跡があることが了解される。そういうプロセスがあったわけです。

#### 線引きからたどる思考のプロセス

線引きが実際にどういうものなのか。ここでご覧いただきたいと思います。ここにあるのが私の師匠にあたる桜井徳太郎の『靈魂観の系譜』という本ですけれども、鶴見和子文庫の貸し出し可能な書架に入っている本です。桜井徳太郎先生と鶴見和子さんは「思想の冒険」という共同研究グループでともに活動していました。この『靈魂観の系譜』を開けますと、赤線が引かれています。鶴見さんの本としては比較的少ない線引きです。この赤線の部分を見ると「柳田国男の靈魂観」とかの書き込みがあるわけです。一方同じく鶴見和子文庫所蔵の鶴見和子さんの著作『漂白と定住』を見ると、そこに「桜井徳太郎、何々」と書いてあるわけです。つまり、『靈魂観の系譜』で線を引いた作業が、『漂白と定住』の執筆や校正につながっている。そういうプロセスが赤線から確認できるということです。

2006年の鶴見和子研究のプロジェクトが、鶴見和子文庫の3部門の通例的な価値でいうと、一番価値が低いと思われていた部門から実は出発していたわけですが、鶴見和子文庫の見え方としては、学生にとってこの図書は赤線の入っ



た読みにくい本にすぎないわけです。ところが、それがアーカイブとして出会う場合には、思索のプロセス、思考の現場ということが言える。つまり、図書館で開示しているという段階においては、単なる「図書」にすぎないわけですが、ある見方によれば「アーカイブ」になる。つまりアーカイブは既存の「もの」として存在しているのではないということをこの事例は言っていて（こうした考えは文献学、書誌学の立場からすれば「何を言ってるんだ」という話になるかもしれませんが）、私の観点から言うと、まさにアーカイブというのはそういった「関わり方」のなかで初めて登場してくるものなのだという事です。

この研究プロジェクトがそういったひとつの側面を持っていたということです。一冊の本が両方の性格を有しているということで、鶴見和子文庫に関するプロジェクト研究はこのあとも進められていき（人間研共同プロジェクト「個人の思想形成と蔵書の研究」研究会、2007～09年度科学研究費補助金（基盤研究（B））、「「普通の人の哲学」と「知識人の思想」の葛藤をめぐる戦後思想史—鶴見和子文庫を開く」2008年～）、さらに個人の論文や学術イベントにつながっていきます。そして共同研究プロジェクトの参加者の関心というのは、生活綴り方、エリクソン、南方熊楠、舞踊、デューイ、河合隼雄、河合榮治郎、1950年代、学習組織論など、こんなに多様だったんですね。それでどういうことが言えるのかというと、まさにこの価値の発見ということが、私たちスタッフによって承認されたというプロセスがそこにあったということなんです。これは非常に重要なプロセスだということです。もともと価値があるんじゃないくて、その価値を私たちが公共的なものとして理解した、というプロセスがあってはじめてアーカイブが完成しているということです。

#### 歴史の回復と価値の共有の場としての人間学研究所

共同研究の基盤としての価値の共有というのは、「価値の共有によるアーカイブの生成」というプロセスがこのプロジェクトではあったわ

けで、参加者の価値の共有というものの、それによってアーカイブができたというプロセス、そしてまたその価値の共有は過去のシンポジウムの歴史の継承と共有もあったのですが、何かと言いますと、実は1999年に鶴見和子さんがご存命中に、シンポジウム「生命のリズム：倒れて後に思想を語る」を人間学研究所で開催しています。そのシンポジウムを受けてこの2006年のシンポジウムが始められたという経緯があるわけです。一番最初に私が紹介しました、歴史を思い出す行為というのは、そこ部分で書かれている部分になるわけです。ですので、そしてその基盤となった場所としての人間学研究所がそこにはあったわけです。つまりシンポジウムの歴史の共有が行われた場に人間学研究所があったということです。価値の再発見と共有の必要というのを私たちは常に要求されているのではないかということです。このことは、人間学研究所でなくてもかまいませんが、大学として私たちが新たな研究をやっていくためには、私たちが「資産」を持っているということをまず認識しなければいけないということを意味しています。私たちの資産を大切にしなければいけない。そして、それを宝の持ち腐れにしないために、再発見を行う「場」が必要なんだということです。それは必ずしも人間学研究所とは限りません。しかし、今現在の状況を考えるとその場が不足している。私たちには全学的に私たちの資産を見直す、そういった場が必要とされているということを言いたいわけです。

#### 人間学の初志としての「ともいき」、学問研究を共有する場の必要など

いきなり話が変わりますが、価値の再発見と共有との関わりでこの人間学研究所の歴史を考えると、「人間学」とはいったい何かという話に移りたいと思います。「人間学」というのは、人間学部が開設したときに唱えられたものなんですけども、大学の設置の趣旨によれば、学園の建学の理念である仏教精神による「人間教育」、「人間研究」を行う場であるというふうに言っています。文化人類学と臨床心理学という二つの学問は、「共に生きる」こと

によって人間を理解しようとする「畏敬の念」を含んだ態度をもつ学問だというふうに言っています。つまり人間学のひとつの基準は、たまたま文化人類学と臨床心理学というものが選ばれましたけれども、そこにあるのは今、平岡学長が仰っている「ともいき」というところに結びついていくものなのだと。だから私は人間学研究所を残せとか、人間学研究所をこの後も万全だとか言っているわけではありません。重要なのは、人間学研究所はこういった趣旨で始められた「のに」、この「ともいき」という、あるいは共に生きるということによってこれらの

学問を共有する作業を怠ってきた、ここに問題があったのだらうと。ですから、私たちがまずしなければいけないのは、こういったことを、人間学研究所で始めるべきだとはまず思うんですけれども、他の場面においても、我々が共有する学問の場をつくるという意思をまず表明することが大切だろう、ということです。これが今回私が『20年の歩み』を編んで得たひとつの理解であります。こういうような形でひとつ、この本を編んだときに私が考えたことを、雑駁な形ですけれども、お伝えしたいと思います。ありがとうございました。